

音楽Ⅱ・音楽Ⅲ・総合芸術選択生へ⑧

音楽科 古川

調④

第④回に訂正があります。旋律短音階の導音と主音の関係が長2度になっていますが、短2度です。

長2度 短2度

I II III IV V VI VII I
導音

1. 移調

8回目は、移調についてです。ある曲を、曲の各音の相対的な音程関係を変えずに、そっくり別な高さ(異名同音を含む)に移すことを移調といいます。

※長調の曲を短調に、短調の曲を長調に変えることは移調ではありません。

移調は形をそのまま高さを変えるのでカラオケでキーを変えるのと同じことです。

問題では次のように問われます。

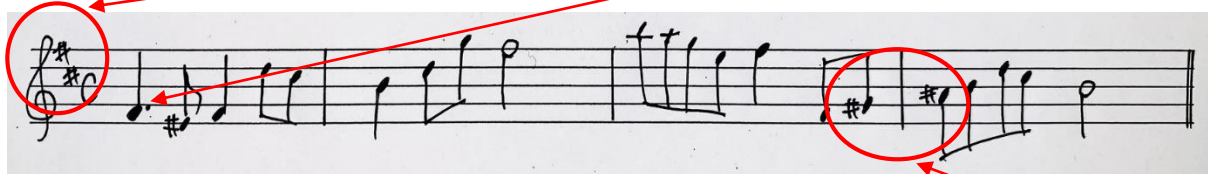
○次の旋律を長3度高く移調し、調号を用いて高音部譜表上書きなさい。

上記の曲は g moll です。ソルフェージュすれば分かると思いますが長調にはなりません。フラットが2つなのは B dur と g moll です。ここでは調を判定する問題ではないので調号があります。ですから Dur なのか moll なのかは頭の中で歌ってみればわかるでしょう。臨時記号が出てきますが、1小節目の Cis は刺繍音(非和声音)と考えられます。

3小節目のEと4小節目のFisは旋律短音階と考えれば納得できます。

問題は長3度高く移調ですね。

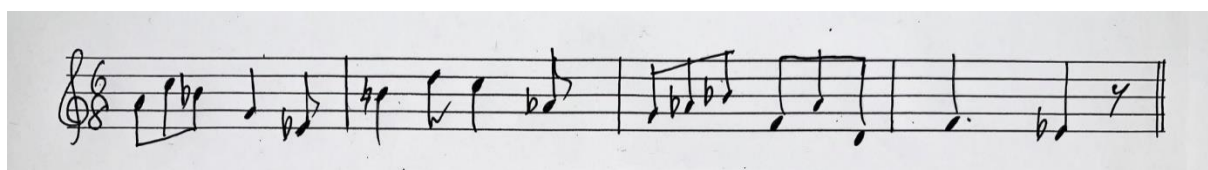
まず、高さを全て長3度上げるのでスタートのDがFisになりますね。g mollの主音から長3度上はhです。なのでh mollで書きます。なので、調号は#2つ、スタートはFisからです。



旋律短音階の第VI音、導音は半音上げられていましたので移調しても半音上がります。注意しなければならないのは、同じ種類の変化記号が付くとは限らないことです。もとの曲の音が臨時記号によって変化している場合、その音が、音階固有の音の臨時に上げられたものか、下げられたものかをよく見極め、移すべき調の該当する音を正確に変化させなければなりません。移調は各調の音階固有の音を調号に頼らずに確実に記憶し、これらの音を臨時に変化させる方法をしっかり習得しておかなければなりません。

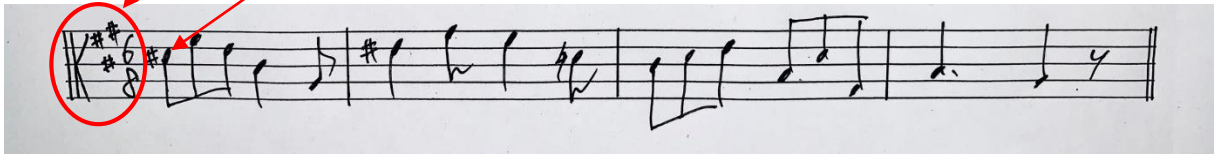
もう一問考えてみましょう。

○次の旋律を減5度低く移調し、調号を用いてアルト譜表上に書きなさい。



まず、何調か考えましょう。AとAsが出てきますがAsのほうが音階固有の音と考えられます。AはBに向かって進む臨時に高められた音です。HとBについても同様でBが音階固有の音です。したがってこれはEs durとなります。調の判定には公式がありますが調判定の会で説明しますので今は根拠となることがはっきりしていません。この4小節ではフラットが3つ出てきていてシにナチュラルが付くが次の小節でBになるのでナチュラルは音階固有ではないと判断し、調号はフラット3つ、終止音がEsであり、ソルフェージュすると長調だということです。それを減5度低くなるので、A durで書くということです。

A dur の調号は#3つ、スタートは Cis ですね。注意しなければならないのは、アルト譜表上に書くということです。ハ音記号で書きます。



開始の音に臨時記号が付くので注意が必要です。2小節目のナチュラルは念のために付けました。臨時記号の有効期間は1小節です。

2. 転調

楽曲が進行の途中において他の調に移行することを転調といいます。カラオケでは後半に半音上がることがよくありますね。転調の実態は、

- ①一時的に違う調に移る
- ②調を決定的には変えずに他の調の音を借用する
- ③一つの調に長くともまらず継続的に転調する
- ④楽曲の大部分を別な調で構成する

など、千差万別です。曲が転調した場合には記譜には次の2つの方法が必要によって適宜用いられます。

- ①調号は変えず臨時記号によって処理する
- ②調号を変更する

ここまでの内容が分かっているならば楽譜を見て、長調、短調、移調、転調が分かります。しかし先ほど述べたように、調号があれば簡単ですが、調号なく調を判定するには知識が必要です。音程、調の関係を考える等、様々な思考を巡らせて演奏に入らなければなりません。調の判定には大きな公式が6つありますが一度に理解するのは難しいです。次回から1つずつ説明していきますので配付された問題で復習をよくしておいて下さい。解答を調の判定の前に出したいと思います。